
放浪

白亜迦舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
放浪

【Nコード】
N2663D

【作者名】
白亜迺舞

【あらすじ】
旅の大剣士コランド・クーフナーはその道中で謎の女性カミエに出遭う。異世界から迷い込み、恋人とはぐれたと言う彼女にコランドは帰郷の為の手助けを引き受けるが、同時に彼女が抱えた大きな秘密に気付いてしまう。

何故だがわからないが、気が付いたら俺は走っていた。

いや、理由はわかっている。俺の背後から重々しい足音が、どたばたと元気よく追ってくるからだ。

つまり、俺は逃げていた。

揺れる大地が、響き渡る足音と荒い息づかいが、その事実を容赦なく俺に突きつける。

軽い仕事だったはずなのに。俺が引き受けた石切場を襲う巨人の討伐、そいつは身の丈六メートルほどはあったが、倒すのはそれほど難しい仕事でなかった。

しかし、倒した瞬間に新たに十メートルを超す巨人に襲われ、そいつが出てきた時に地盤がゆるんだのもあって俺はその場を退いて、………そのまま逃げ続けている。

情けねえ！ 情けなさ過ぎる！！

こんな事が兄貴に知れたら、また足腰たたなくなるまでしごかれる。

こんな時の兄の仕置きはいや増して厳しい物になる。自分の思いつきに涙がにじんでばやけはじめる俺の視界。

と、そこに、一人の女の姿が映った。

「おいっ！ 逃げろっ。危ないぞ！！」

だが、その女に俺の呼びかけを意に介した様子はなかった。彼女は、自分の意志でここに立っているんだ、という様子で俺に向かって花のように微笑み、そして両腕をあげ手のひらを二つ合わせこちらへ向けた。魔術師のよくやる攻撃の姿勢の一つだった。

止まる訳にはいかず、俺が彼女の方に向かって走る間に、彼女の両手のひらに生まれた七色の輝きの光が見る見るうちに丸くふくれあがっていく。俺が止まりきれず彼女の横を走り過ぎる時、光の玉は大人の頭ほどに大きくなっていった。

——と、羽？

彼女を横から見た時、彼女の背後にやわらかい輝きを持つ金の髪と共に、燦然たる光でつくられた二枚の翼が見えた気がした。立ち止まろうとしたところで、彼女がためていた力を解き放った。かすかな音と眼も眩む光が放たれ、その強い力の波動に背中を押され俺は前のめりに転んだ。

派手に転んだ。受け身を取れずもんどり打って地面を二三回ころがった後、涙目で立ち上がった頃には彼女の光は既に収束していて、俺の目に映ったのは翼の生えてない普通の女と、大の字に仰向けになっている巨人だった。

——す、すげえ。

わずか数秒の〈ため〉で巨人を一撃に倒すなんて。あれだけ大きな力を放った割に、金髪の女には疲弊した様子が全くない。ただ穏やかに、身に纏った黒いマントが風になびくに任せて立っている。

——て、まだ息がある！

巨人が仰向けのままもがきはじめてのをみて、とっさに俺は奴に向かって駆けだした。転んだ時に落としてしまった大剣を拾い上げ、巨人の仰向けになった胸板に飛び乗り首筋に切っ先を押し当てた。

「おい、俺の声が判るか？」

巨人の胸板をどんと蹴ると巨人は目蓋を開けた。奴は俺を見た途端、ばかでかい両手で俺を掴もうとしたが、首筋に当てた剣に少し力を込めると動きを止めた。悪ガキのような愚鈍な目が俺を見上げる。

「俺はお前に二つの選択肢をあげてやれる。一つはもう二度とあの石切場を襲わず、仲間を連れて自分たちの居場所に帰る事。もう一つは、今の条件を聞かずに俺と戦い命を落とす事。おい、どっちを選ぶ？」

巨人は死にたくないようだった。うるうると瞳を涙で満たし、許しを請うように首を振った。

「俺はお前が金輪際何もしないって言うんなら、お前の命を奪う

つもりはない。でもな、お前が悪戯を続けると危ない目に遭う人多すぎるんだ。だから、これ以上やるってんなら容赦はしないぜ」

ひとつ呼吸をして、間をおいてから俺は訊いた。

「もうしないな？」

うんうんと巨人は頷いた。それをみて俺が巨人の上から飛び降りると、巨人はそのそと大人しく立ち上がって、十メートルの高見から俺を見下ろした。

「もう行けよ。これに懲りたら、もう悪い事はするなよ」

俺が笑ってやると、巨人もでっかく笑ってもときた石切場の方に歩いていった。あそこでまだ目を回しているだろう仲間を拾って、そして更に向こうにある住処に戻るのだろう。帰ると良いんだが。

巨人を見送って、振り返るとさっきの女がまだ立っていた。女は後ろに手を組み、金の髪を風にたなびかせ、さも親しげに俺に微笑みかけていた。

金の髪、落ち着いた青緑色の瞳、白い肌。真っ黒いケープと同色のスカート、その下には薄い魔術紋様が刺繍された白い服、それらのコントラストが異様に目立つ。

「あんた強いんだな。ありがとう、助かったぜ。俺の名はコランド。……うん、コランドだ」

ファミリーネームは恥ずかしくていえねえ、それは俺が旅に出て四年間ずっとコンプレックスみたいにつきまとっていた。

彼女はそんな俺の胸算段を知らない。ただ無邪気な少女のように笑って答えた。

「私の名前は神恵。七那瀬・神恵。十九歳です」

陽気で朗らかな声だった。しかし、その内に少しの戸惑いのようなものを感じた。

「ナナセ・カミエ……？ ああ、後の名前がギブンネームなのか。俺は十八歳だ。あんたより一個下か。何処から来たんだ？ 一人旅なのか？」

彼女は強い魔力を持ち、戦いになった一人前の旅人のようだが、

俺から見る限りあまり一人旅を好むようには見えなかった。人懐っこいオーラ全開だったから。しかも、こんな人気もない山の間。何か訳ありのようにしか見えなかった。

「もしかして、仲間とはぐれちゃったのか？」

俺が質問すると、彼女は途端に目をうるうるさせはじめた。続けるような視線を俺に送り、いかにも自信なさそうに訊いてきた。

「ねえ、盾を、天柄盾を知らない……？」

「その名前に聞き覚えはないな。それがあんたの仲間か？」

素直に俺が答えると、カミエはぺたんと地面に座り込んでしまった。

「おい、どうした!？」

俺がカミエに近寄ると、彼女はうるうるの瞳で俺を見上げ、呟くように言った。

「おかしいの……。私達、遺跡の調査をしていたはずなのに、気が付いたら私だけこんな山奥にいるの。どこにも盾がいなくて、心細くて、巨人が走ってくるし、それに……」

彼女が言葉を切って、地面に横たわった。

「具合でも悪いのかっ？」

ここいらの低木の実には毒がある。それを食ったのかも知れない。——と、いう心配は無用だった。

「お腹空いた……」

この地帯に特有の乾いた温かい風が吹いた。

＊ ＊

太陽はまだ南中して間もない。天高くから照らす太陽の光が降り注ぐのは、鉱山の合間に挟まれた乾いた平原。強い鉱石成分の為植物はあまり生えないのだ。ここいらはただ座っているだけには少し殺風景すぎる。

依頼を受け報告に行くべきミリク村からもそう遠く離れている訳

でもないが、空腹を訴え歩こうともしないカミエのために、俺は火を焚いて簡単な昼食を作る事にした。

「おいしい。このパンおいしいよ」

「そうか、よかったぜ」

乾燥果物とパン、それに俺特製の調味料を組み合わせでつくったサンドイッチを、カミエは口いっぱいにはおぼっている。よほど腹が減っていたのか、三枚、四枚と次々に完食していく。俺が果物を煮て戻すのが間に合わないほどだ。

「なんか、私、人の家のないところでこんなおいしい物食べたのはじめてかも」

「あんたは作ったりしないのか？」

カミエの手が止まった。どうやら彼女のウィークポイントだったらしい。

「……私だって頑張ったもん。頑張っても、上手に作れないんだもん……」

「ああ、わかった、わかった。落ち込まなくて良いから、どんどん食え」

と、反射的に慰め、次には後悔した。カミエはやけ食いするようにパンを口に押し込みはじめ、更に次々と手を伸ばす。この後、食材を買い足すのは高く付きそうだ。

「盾も刀夜もろくに作れないくせに、人のご飯、不味い、不味いつて。だったら、自分で作れっつての！」

徐々にパンをむさぼる彼女の瞳が凶悪さを帯びてくる。これは、話をそらして見る必要があるそうさ。

「あ……、トウヤ、て言うのは？」

「刀夜は盾の弟。二人は双子なの。私より三つ年上」

「二人は剣士か？」

「盾は魔法剣士で、刀夜は魔剣使い」

「それで、カミエは魔法使いか」

前衛となる剣士二人に、後衛の魔法使い。剣士二人はただ剣を持

っただけではなく特殊なスキルも持っている。旅人のパーティー構成としては理想的だ。目の前に座るカミエは魔法使いとしてかなり高い能力を持っている。三人そろえばまさに、向かうところ敵無し、だろう。

そんな風に見た事のない三人パーティーを目に浮かべていた俺だが、ふと気が付くとカミエは居心地悪そうに俺の前に座っていた。

「……魔法使い、か……」

「どうかしたか？」

すると、カミエはううんと手を振って笑った。少し嘘っぽい笑い顔だった。

「コランドは剣士だよ。でも、随分大きな剣を使うんだね」

話題が変わられたみたいだった。しかし、俺は特に彼女の様子を深読みするのは止め、布で覆って地面においてある自分の剣に目を向けた。

「ああ……、『トリニティブレード』って言うんだ」

「どの位長さあるの？ 重くない？」

「長さは全部で百八十センチくらい、重さは六キロくらいか」

『トリニティブレード』は、平行する三本の刀身を柄で一つに纏めたような形を取っている。一つ一つの刀身はできるだけ細く作られているが、それでも全体として幅広くなって、三十センチ以上ある。

「三本の剣で、それぞれ魔剣みたいに力を持っているんだ」

カミエは興味津々と言った様子で剣を見ている。

「どうして、そんなに大きな剣を持っているの？」

ああ、当然の質問であるが、なかなか苦手な質問だった。しかし、きかれれば答えるしかない。

「この剣は人に貰ったもので、その……、俺は……、大剣士なんだ」

「大剣士？」

がたん、と鎧を鳴らして乱暴に立ち上がる。驚いたカミエの眼が

丸くなる。

「……おう、我こそはクーフナーの五人目の大剣士〈三烈の曲撃〉、コランド・クーフナーだ……ぜっ！」

そう、立ち上がって名乗りを上げること、それが大剣士としての振る舞いだと兄に教えられた。教えられましたのです。

だが、この泣く子も黙る〈クーフナーの大剣士〉の名乗りに彼女はおかしそうに首を傾けたただけだった。

「へえ、すごいんだね。多分。私はよくわからないけど、すごいんですよ？」

ちよつと意外だった。冗談抜きで、今の世の中どんなに地の果てへ行こうとも、〈クーフナーの大剣士〉達の話は誰であっても知っているはずだ。別に俺が大剣士云々であることにかかわらず、それがこの世界の現状なのだ。それを、旅人であるカミエが知らないのは、おかしい。無知とか、そういった次元の話ではなく。

お分かりのように、俺は自分が大剣士であることを彼女には教えたくなかった。つまり、今、俺は無念と諦念感で胸が一杯。いつもはそうなる。

しかし、この時ばかりは違う。ちよつとばかり、いやかなり、様子に不自然なところの見当たるカミエに、俺は落ち込むのも忘れて彼女に質問する。

「なあ、〈クーフナー家〉って知らないのか？」

「うん、聞いた事無いよ」

いつわる様子もなく、彼女は知らないという。

「カミエ、何処で生まれた？ 近くの国とか教えてくれ」

脈絡の欠いたような俺の質問にカミエはますます首をかしげる。

「エレル村、ヒコヤーニ王国の西の方にある……」

今度は俺が、聞いた事無い、と言いたくなる番だった。世界中の地理は一通り憶えているつもりだ。

だがしかし、俺はそれを口にはしなかった。少しの間だけ、俺は考え、そして結論した。

「カミエ、もう食べなくて良いのか？」

さらに、ちよつと脈絡のない発言。カミエが虚を突かれた表情をする。

「うん、もう良いけど……」

「じゃあ、とりあえず、ここから北西の方に俺が依頼の報告をしに行くを受けたミリク村があるから、そこまで一緒に来ないか？」

言うだけ言って、彼女の返事を待たずに、広げていた調理用具を纏め、大剣を手に持ち立ち上がる。カミエもとりあえず腰を上げる。

「そんなに遠くないから、ゆっくり行こう」

足を踏み出すと、乾いた土が、しゃら、と音を立てた。俺は彼女を背に歩き出す。

「ねえ、待って。さっきの聞いたのは何だったの？ コランド」
ばたばたと彼女が追ってくる。

——そういえば、カミエは俺より頭一つくらい身長が違う。そのうえ女だった。歩幅が違うから、かなりゆっくりあるかないと置いてしまうかも。

カミエの質問に、俺は振り返らずに答えた。

「村に着いてから、もう少し、ゆっくり話そうぜ」

背後のカミエから納得した様子は伝わってこない。しかし、それでも良い。これから俺は彼女に長い話をしなければならぬのだから。それは、彼女が——というより普通の人間なら誰でも——簡単には認めないような話になるだろうから。

1 (後書き)

w e bに小説を載せるのは初めてです。つたない話かも知れませんが、最後まで読んで下されば至上の喜びです。

村に着くと、まず俺は巨人討伐の依頼主である村長を訪ね報告をした。当初の予定に反して、巨人一人の討伐が二人を退けたことを報告すると、村長からは、

「巨人を二体相手にしても全く動じず、こうして無傷で帰ってこられるなんて、さすがは〈クーフナーの大剣士〉ですな」

と、ほめられ追加の報酬が出た。

俺一人でやった訳じゃないんだがな、と言いたかったが、そんな事を話せば話はややこしく長くなるだけなので、黙って賛美と報酬だけ貰って村長宅を後にした。

もちろん、報酬を独り占めしようとはしなかった。きっちり半分にしてカミエに渡すと、

「いらないよ。べつにお仕事して巨人を倒した訳じゃないし、私が助けたコランドはご飯を食べさせてくれたし」

と、断られた。それに加えて、

「それに……、そんな銀貨、私見た事ない……」

確かにこの銀貨はちよつとばかし珍しい。この銀貨自体の大きさは小さめだが、純度は他の銀貨よりずっと高く、しかし軟らかくないのは近隣の王都につたわる金属強化の魔法が一つ一つにかけられているからだ。年月がたつてもくすんだりしないこの銀貨は、美術品としても評価が高く、遠くの国に持って行くと喜ぶ人も多い。

珍しい銀貨だが、旅人であれば一度は目にする。やはり、彼女が知らないのは不自然である。

まあそれはともかく、とりあえず、俺はカミエを連れて、村の食堂に行った。

「——つまり、コランドは私がよその世界から来たって言うのね」
「ああ……、それ以外に考えられん」

村人達は勤労なことに、皆農作業や鉱山に行っているようで、食堂には人気がない。静かな食堂で俺が一方的に質問を重ねカミエの状況を引き出させて貰ったところ、この結論に行き着いた。

「でも、そんなことあり得るの？」

「さあ、俺は判らんが、子供の頃は違う世界から来た旅人の武勇伝を聞いた事がある気がするぜ」

当然の事ながら、彼女は強く動揺していた。少し黙った後、強い口調で俺に問う。

「なんでそうなるの？ おかしいよそんなのっ」

「だから、落ち着いて聞いてくれ。まず俺が、あんたがこの世界の人間じゃないと思う原因の一つは、〈クーフナー家〉を知らない事だ」

「さっきも言ってたよね、それ。ねえ、それは何なの？」

焦りを隠そうとしない明け透けな彼女の瞳。ターコイズの甘い緑色から目を反らさず、俺はこの世界の『常識』を話し始めた。

「〈クーフナー家〉は簡単に言えば、強力な魔法使いの一族だ」

——一族に生まれた者はほとんどが魔法に対するある程度の才覚を持ち、本流ならそこの魔法使いとは比較にならないほどの素質を持つ。

しかし、それだけでは万人が知るに足る存在とは言えない。クーフナー家は歴史としては五百年と少しくらいの時間しか持たない。彼らが人々に好意を持って、ある場合には敵意を持って、その名を呼ばれるのは、すべて先祖達が残してきた伝説による。彼らは単なる魔法使い一族ではなく、己等の力と知識を駆使し、発明者として政治家として、或いは勇者として使い、世界に干渉し続けている。

「コランドが大剣を背負って旅をしているみたいに？」

「まあ、そうかな。俺の場合はちょっと違うんだが。あいつらは自分の足で世界を巡らなくても、手練手管、あちこちに取り入っては好き放題するんだ」

と、ちよつと強い口調で言いすぎた。カミエが目を丸くしてこち

らを見ている。だがこのことを弁明することは避け、軽く咳払いして何事もなかったかのように続けた。

――〈クーフナー家〉で最も知られている伝説は何と言っても五百年前のクーフナー初代達の伝説、通称『神牛の勇者達』だ。

五世紀前の当時、クーフナー家は存在もしていなかった。世界の名だたる魔法使い達はヴューネイ家とキティス家に別れ、一般市民を巻き込んでまで戦闘するまでに対立していた。そんな中、世界を支える高位存在『巨牛神クジャタ』に異常が起き、世界は崩壊の危機に臨まされる。両家の対立をおさめ世界の力を一つに束ね今につないだのは、初代クーフナー家頭首シラー・ヴューネイ、その妻リジニア・キティス、そしてなにより、五百年たってもその名が人々の記憶から薄れる事のないのは〈大剣士バッツ〉。彼らはその後、現在十二世代まで続いている。

「ふうん、なるほどねえ」なんだか生返事っぽいカミエ。

「飽きてきてないか？」

「ううん、私は別に。――あ、もしかして話し疲れたの？」

「あ、いや……、もう少しさ」

――以来クーフナー家は、勇者の子孫として世界の平和を、或いは世界一の魔法使いの家系として魔法技術の発展と管理を、その両手に担って途切れることなく栄え続けている。一般の冒険者には手に負えない魔物の殲滅と封印、王国の執務の補佐、医療の発展、など、分家を入れれば頭数は相当なものなので彼らが為すことに枚挙の遑がない。

さらに、一族には魔法使いかそうでない者の、いずれかしかないのではなく、三世代に一人の割合で〈大剣士バッツ〉のような並はずれた身体能力と剣技の才を持った者が生まれる。魔法の才は皆無だが、勇敢で、優しい心を持つ大剣士達はいっしか他の大剣士達と分けて〈クーフナーの大剣士〉と呼ばれるようになった。

「で、コランドもその〈クーフナーの大剣士〉なんだ」

うん、と無意識に返事をして、慌てて「いや、それよりあんたの

話なんだが」と彼女の興味がこちらに向くのを止める。彼女はやや怪訝な面持ちになってしまいが、俺は相手にしなかった。

——できなかった。

「とりあえず、俺が話す事はここまでだ。後はあんたの方から適当に質問して欲しい」

日が傾きはじめ、日光は橙色をおびてくる。気の早い農民達が談笑しながら村に帰ってくるのが聞こえる。食堂にも一人、二人と入ってくる。

しばらく俺が待っていると、カミエがぽつりと言った。

「たぶん、コランダの言う通りなんだと思う。この空は、私が生まれた時から私を見下ろしていた空とは違うんだと思う。でも、だったら、私はどうしたらいいの？」

風に揺れる灯火のような揺らめきを見せる声音だった。だが――

「さあ、しばらくあちこち旅をしてたら帰れるんじゃないか？」

俺が聞いた昔話はそんな風だった気がする」

何故か無神経に答える俺がいた。己の失言に気づいた時には、カミエが、バン、とテーブルをたたいていた。

「そんなの」俺を見る彼女の目には涙の滴が輝いていた。「いつになるかわからないじゃない！」

カミエはまくし立てる。

「本当に帰れるかどうかもわからない。帰れても、何年待たなければ行けないのかもわからない。それに、こんな全然知らない世界で、私は何処を歩けばいいの。盾がないのに、私は一人きりで旅をしないといけないの？ そんなの、私は嫌。私は早く帰りたい。早く帰って、盾に会いたい」

本気の日、瞳の奥に揺れる激情の炎をはっきりと見た気がした。

俺はどちらかというと、そういった色恋の話には縁がなく、理解しがたかった。だが、理解出来ない俺でもこの時は、カミエがジュンという男を心から『愛して』いて、分かちがたいほどのつながりを感じているのだと、ハンマーで殴られたみたいな衝撃で、はっき

りと、頭よりも胸で感じ取った。

そして、爆発のような彼女の告白の衝撃に揺られるままに、俺は懇願されていた。

「力を貸してコランド。私一人でどうしたらいいかわからないの。お願い、私を元の世界に帰して！」

緑の瞳は、燃えるように熱望にうなされ、夕日に映える緑の葉だった。

俺は努めて声を低くし、落ち着け、とまず応えた。立ち上がっていた彼女が腰を下ろしたところで、俺は最大の効果を狙った声で、もちろんだ、と話し始めた。

「俺は、いままで大したこともしてきてない半人前の旅人だ。でも、この〈大剣士コランド〉の名に賭けて、カミエ、あんたを必ず元の世界に帰してやる！」

そうして、俺とカミエの短い二人旅がはじまる。

しかし、その前に確かめるべき事があった――。

――
――
――
――
――

太陽が沈む前に、今日できることをすることにする。そう彼女に提案した。

「この村は小さいからな。言い方は悪いが、探すところは少ない。この日が沈むまでの一時間で、探し尽くせる。そうしたら、次の夜明けにはすぐにこの村を出て、ここから半日北北西に歩いた先にあるラグの街に行く。いいか？」

「でも、どんな事が手がかかるになるの？」

「一番良いのは、過去に大きな『力』が動いた形跡がある遺跡や

戦場跡。そういったところは、人こそ来ないが、外の世界から来る強力なモンスターが通つてくると昔聞いたことがある。つまり、そう言った場所は空間が歪んでいるから、あんたもそこから帰れるかも知れない事だ。もしくは、あんたがここに来るまで居たって言う遺跡に似た場所。空間を隔てても、作りが似た場所は繋がって居るとも言うからな」

言うだけいってから、頭一つ低い位置にあるカミエを見下ろすと、カミエは感心したように俺を見上げてくれていた。

「流石、世界一の魔法使い一族の一人、といったらいいのかな」
ウィンク。

「……その言い方は止めてくれよ。俺は魔法使いじゃないし、先代の大剣士達みたいに英雄的なことだって何もしていない」

カミエの無邪気な言葉に、俺は苦い気持ちで一杯だった。しかし、彼女はさらに俺にこんな風に問う。

「でも、コランドは〈クーフナー〉の名前に誇りがあるんじゃないの？」

否定できなかった。

「……………いや、でも俺は……」

「自信を持ちなよコランド。今は駄目かも知れないけど、これから何年も旅をするんでしょ？ きっと、いつか、コランドも立派な〈クーフナーの大剣士〉になれるよ。コランドは優しくて、そしてなにより、コランド自身そうありたいと思って頑張っているんだから」

西の地平線の太陽の光に、彼女の目は金色に煌めいていた。くもりのない光は、俺の心の弱い部分をさらけ出し、ど真ん中を射抜くみたいで、正直、耐えられなかった。

時間を無駄にするな、と顔を背けて言った。右の耳から、じゃあ、行ってきます、と言う彼女の声が入ってきた。それもまた、俺の柔らかいバターみたいな闇にさっくりと刺さった。

こんな黄昏時に、疲れた農民達はよそ者なんかと話をしようとは

しないだろう。彼らは彼らの社会で穏やかな疲労を、物静かな沈黙の中で共有することを好むから。

——俺は彼女を欺いた。

カミエと別れて夕暮れの中を歩く。疲れたような、それでいて清々しいような表情を浮かべた村人達とすれ違っていく。朗らかな笑い声の響く黄昏の景色がとてもあたたかく、後ろめたさを抱える俺の胸を打った。

カミエと別行動を取る必要はなかった。口実を並べて、彼女を遠ざけただけ。俺が彼女と別れたのは、少し考えることがあった、包み隠さず言うならば、彼女の正体に対して疑問に思う、或いは警戒すべきところがあると判断したからだ。彼女はそれに気づかず、何も言わないで俺と離れた。

『歴代のクーフナーの大剣士の中で最も器用な大剣士』、俺はそう身内からは呼ばれている。それは揶揄と賞賛、どちらの意味もある。

過去の大剣士達は余りに武骨すぎて度々命を危うくしたり、他者を守りきれなかったりという伝説が多い。それこそが大剣士の誉れである、と人は言う。騙されたり、利用されたり、それでもくじけない一途な強さが大剣士の強さであると。だが、俺はそうは思わない。第一、それを言い始めたのはクーフナーの魔法使い達、世に広めたのは何も知らない無垢な人々。魔法の才を持たない大剣士達は、魔法使いである一族の者達にとっては所詮邪魔者でしかない。大剣士達は、いくら人々に愛されても、身内には嘲笑われる存在なのだ。俺はその事を知ってしまった。騙されるのを恐れ、未知の存在に対して警戒を忘れず旅をしている。そして、器用という二文字が俺に与えられた。

——そんな事はどうでも良いか。

今はカミエの事を考えるのだった。くだらない自嘲に浸っている時ではない。

第一印象としてのカミエは、優しげな春のこもれば、かげりない太陽の光、地中にあっても輝きを失わない宝石、そのように俺は感じた。それは彼女のかわいらしさや心優しさをたたえているのではない、俺は彼女に人間らしさを感じなかった、そういう事だと思っている。

雑踏を離れ、人目に付かない位置に立つ。背中に背負った大剣を鞘ごとおろし、柄を地面においてたぐるようにして刀身をむき出しにする。俺の大剣はその大きさ故、必要な時だけ片手で背中からひっこ抜いて使う、なんて事はできない。いつでも闘えるように抜刀したまま手に持って歩くか、しっかり鞘に収めて背負っているか、そのどちらかしかできない。なんらかの敵に襲われる危険性がある場所では――人里離れた地、街の治安の悪そうな所――俺は大剣を抜き身で歩くようにしている。

大剣へトリニティブレードを左手に、右手に持つのはカミエからこっそりとった彼女の金の髪の毛だ。長い髪の毛の彼女はよく髪の毛を落とすから注意していれば拾うのは容易い。

トリニティブレードは『考える剣』だ。別に『意志のある剣』ではないが、持ち主が決まった手続きに従って情報を入力するとそれに適した答えを出力する『電算剣』なのだ。この世界の外からもたらされた物で、その世界では『コンピューター』と呼ばれる代物が内蔵されているらしい。

トリニティブレードにカミエの髪の毛を巻き付ける。柄の宝玉に触れて小声で剣に質問をする。

――この毛髪の毛の持ち主の身体情報を出力せよ。

剣が輝きはじめ、空中に光の板が出現しそこに計算結果が文字で出力される。身長、体重、等にはじまる彼女の身体的特徴を数値化した物だ。この中には対象の腕力や誕生日もある。

ごちゃごちゃと文字が入り組んでいるので読むのに時間がかかる。
出身地……エレル村、絶対座標X…-5000，Y…-1000

0、――年齢、17・5才。

やはり、と思った。俺がはじめて彼女にあった時に感じた違和感、それは彼女が自分で言った年齢より若干若い、というものだった。これは彼女が嘘をついたという事とは違うだろう。トリニティブレードの分析の中にある細胞レベルの項目では、彼女の魔力親和性が常人の百倍の数値を示している。

つまり、彼女は人間ではない。或いはなんらかの原因により『人間』という枠組みから外れてしまった〈半高位存在〉であるのかもしれない。

だけど、と俺は無意識に呟いた。それで彼女をどうするというのだ。人間じゃないから、斬り捨てるのか？

疑問があったから、警戒するところがあったから、それを明らかにした。だが、それでどうなった？ 俺は、またもや迷っているだけだ。なぜ、彼女の知らないところで彼女の正体を調べるような事をしているのか？ 知って、それでどうしようと言うのか？

気が付くと日は沈みきって、俺の隠れた物陰には一筋の光もない。先程まで光っていた大剣も、今は何事もないように地べたに転がっているだけだ。一寸先も見えない闇の中、俺は一人自問し続けた。幾度となく、どうする、と。

まるで、この狭い空間に満ちる闇は、俺を惑わす疑問そのもののように渦巻いてさえ見える。

不意に宵の空に悲鳴が響いた。外敵に対する、警戒の叫び。反射的に俺は剣を取り、物陰から飛び出した。

2 (後書き)

ちよつと『クローフナー家』について長々と書きすぎてしまった気がします。

＊＊

ごめんなさい、とカミエの静かな呟きが聞こえた。闇の中でも光を失わない美しい金髪をなびかせ、俺から遠ざかろうとする。

「待ってくれよ」俺は思わず強い力に突き動かされ彼女の腕を捕まえた。

「私にさわらないで！」

悲しみに澄んだカミエの声が静かな空に響く。

「俺には謝らせてくれないのかよ。俺だって、あんたに嘘ついてたんだ」

俺の告白に、彼女は知っていると答えた。

——既に知っている告白なのに、どうしてこんなにも胸に痛いんだ。

どうして、俺達は互いに後悔と謝罪に揺れているんだ。

＊

俺が悲鳴に応えてその場に駆けつけると、そこには既にカミエが立っていた。

周囲に戦闘力のない村人はいない。

カミエが静かに見上げているもの、残光の空に浮き彫りになっているのは輪郭を持たない深い闇の固まり。

——なんだ、あれ。

咄嗟にトリニティブレードの切っ先をそれに向けて構える。俺が命令をすると、トリニティブレードは分析をはじめめる。

いわく、高位存在より発生せし妄念暴走体。実体は物質面において希薄、三次元空間より異相しており通常の攻撃では撃退は困難。

名前は――。

「へカオティック」

穏やかな怒りに満ちた女の声。敵意に溢れたその呟きが、カミエのものだと気づくのによしこの時間が必要だった。そして、俺がそうやって戸惑っている間に、俺の眼前でかつてどんな物語にも見たことも聞いたこともない戦いが繰り広げられる。

宵の空に黒く、まるで大穴を開けたように浮かぶへカオティックが次第に輪郭を顕しはじめる。四枚のはね、長い胴体、ワイバーンの姿をかたどったようだ。いや、奴が象る姿は俺達の伝説に語られる、眠りにつきし闇の神へヴィーバネイトの最も数の多く現れた使い魔、へダークドラゴン」の姿だ。

――なぜ知っているんだ？

カミエが知っていて、俺が知らないのだから、多分奴はカミエについてきた異世界のモンスターということだろうに。

だが、俺の疑問はこの場に置いて何の意味をなさない。ただ、戦いの前の緊張だけがふくれあがっていく。

いまではもう存在しない伝説の怪物の姿を取ったへカオティック。対峙するカミエは、全く恐れる様子を見せず、静かに瞳を閉じた。両手を高く掲げ背を伸ばすと、その背に光が集まりはじめる。七色の光は虚空に滲むように輪郭を作り出す。木の葉のような形の美しい翼の輪郭を。

間もなくして、光と闇は同時に姿を顕わにした。それが、戦いの合図だった。

ダークドラゴンを象ったカオティックが翼打ち、大きな風切り音と共に旋回する。微動だにしないカミエを観察し、急降下するようにみせかけ、無数の黒い槍を打ち出した。

カミエが動いた。背の翼から放たれた僅かに揺らめくだけの光の波が、絶大な破壊力を持つであろう黒い槍を一瞬で消滅させる。継いで放たれた光の粒子がカオティックをねらい打つために集束する。迫り来る光の裁きを逃れた闇が、神々しい輝きに包まれたカミエ

に襲いかかる。

カオティックが爪を伸ばしカミエを撃つ。

轟きにえぐられたのは大地。

カミエは足を使わず、翼による高速移動でまばゆい光跡を描きながらカオティックの死角に潜り込んだ。

くすりとカミエが光の中で笑ったのが見えた気がした。それは、絶対的優位に立った者が見せる自らの力に『酔う』噛い。

彼女が片腕を掲げた刹那、溜めの時間もなく極太の光が打ち出される。

光の杭が黒い巨体をえぐる。夜が悲鳴に震える。

振動する空から新たな小さい影が顕れる。

光が散弾する。カミエが風に舞い、全方位に絶え間ない攻撃を与える。

それは光と闇のサーカスだった。醜さと美しさで見る者を魅了する白と黒の演舞。

——だが、これは異常だ。

何が異常か。それは、この戦いにおいてカミエが魔法を一切使っていない事だ。

魔法を使わなくともある程度の遠隔攻撃はできる。法術や念動力・闘気などと呼ばれる、精霊を行使せず人間自身が持つ精神力だけで戦う技術。しかし、それらの技は攻撃よりは治癒や防御むきだったり、武器と併用して使うものだ。ましてや、正面きって純粹に力を使つて合うような戦いは無理だ。人間の精神波動はそんなに強力ではない。だからこそ、魔法、精霊を魔力で操り効率的なエネルギーを引き出す技術があるのだ。

例えばカオティックも魔法を使っていない。それは、カオティックが独立して強いアストラル波動を発生させられる「モンスター」だからだ。

何故、彼女が魔法を使っていないと言えるのか。それは、あれだけ眩い光を操っているにも拘わらず、彼女の周囲では光属性の精霊

すら動かされていないからだ。魔法を使えない俺でも、家や旅の途中での訓練によって精霊の動きぐらいは感じることができる。

カオティックやアストラル的なモンスター達は強い精神構造を持つから十分強力な攻撃を単体で出せる。それと同じ事ができるカミエは――〈半高位存在〉。

天高く、黒竜より高く昇った翼を持つ女から、光のあられが降り注ぐ。

半高位存在とは、神、魔族といった高位アストラル存在と人の合いの子みたいな者だ。半獣種族と似ている、只人とくらべアストラル的な面において圧倒的な強さを持つ。

無数の光の穴を開け、カオティックは空に解けていく。

戦いは終わりを告げたようだ。

東の空に、月がかかる。

光の翼を広げ、ゆっくりと降りてくるカミエ。月光のように。

彼女のような半高位存在はそういる者ではない。絶大な力を持つ彼ら、希有な存在を人はこう呼ぶ。

『化け物』と。

＊＊

「ごめんね、黙ってて」

星達が変わらずキラキラ輝く空の下、彼女の声は闇に沈んでいく。

「驚かせたくなかったの。コランドは優しいから、嫌われたくなかったの」

ふふ、と自嘲する声が夜風の温度を下げる。

「気味が悪かったでしょ？ 私の力は、全然、普通の人が使うみたいない力じゃない、太陽さえも翳らせる力。飛んだり、光ったり。……それに、私、嗤っていたでしょ？ 愉しいんだもん、戦うのが。この力で、私はカオティックを狩る。まるで、モンスターみたいでしょ？」

「その何処が悪いんだよ」

こちらを見ようとしないう背中、弱気に消えそうになる声を励まして言った。

「あんたが何だって構わない。俺は気にしない。俺は……俺だって、似たようなものなんだから」

カミエの後ろ姿がかすかに疑問に揺れた。

「俺の家では魔法使いとして生まれるのが普通だ。だから、俺みたいな大剣士は間違った存在みたいに扱われる。魔法学もろくにわからないくせに、身体ばかり丈夫で、屋敷の中を走り回っていると白い目で見られたものだ」

——それが何だと言うんだ？

そんなのはありふれた腕白小僧の疎外感に過ぎないだろう。強大な力を背負って、人と違う存在になって、時空を隔てた世界に好きな男ともはぐれてやってきてしまった彼女にくらべれば、ほんの、取るに足りない些細な心傷だ。

考えるんだコランド。何の為に彼女の正体を調べたんだ？ ただ、

野次馬的な好奇心のためか？

彼女の正体が人間じゃないからって——

「あんたは、人間だ」

俺の言った事は、多分、風に舞う木の葉の欠片にも値しないだろう。それでも、伝えたかった。

「あんたは優しいじゃないか。腹が減ったって言って、うまいもんを食って、うまいって笑える。恋人がいて、そいつに会えないって寂しがっているただの女だろう？ 化け物でもモンスターでもない、少しだけ普通の奴と違うだけだ」

彼女の手をそっと取った。細くて、不安に震えてて、冬の風に揺られている場違いな花のような手首を、折れないように、傷つけないように。

「ひとりでするんだ？ 帰りたいんだろう？ ——信じてくれ。俺はあんたの事を勝手に調べた。でも、だからってあんたの事

をバケモンだなんて思ってない。俺は、あんたを助けたいんだ。だから、俺にできることをしようとして……、俺は、カミエを……」カミエが掴まれている手を引こうとした。けれど、俺は放さなかった。これが正念場だと、試されているんだと思って、決してこの手を開こうとしなかった。

「信じていいの？」それは、冬の終わりにはじめて吹く、自信なさげな東風のようなだった。

「嘘はつかない。……もう、絶対、あんたを欺いたりしない」

そう言って、俺はカミエの手を放した。

夜闇に、金の糸がひらめいた。

「……私の事、好きになっちゃ駄目だよ」

悪戯っぽく彼女が言った。暗くて顔は見えないけど、笑ってくれているんだと感じた。

「友達だと思っちゃいけないのか？」

「ふふ……どうしようかな」

星空の下にも星が降りてきたみたいに感じた。うれしさが、天の星も地の星もより明るく輝かせていた。

一一一一一一一一

緑の少なめな黄色いシルエットの山々に太陽が赤く昇る。色素の薄い大地を紅に染めて、世界は今日という日に生きる為に息吹を与えられる。群青が白んで、やがて朱く染まる夜空に、いつも俺は赤子の頬を思い起こす。朝焼けに、世界は朱く照らされるだけではない。脈打つ鼓動が聞こえるほどに強い命の光が、太陽から、そして大地の上にある全てのものからも放たれるのが俺には感じられる。軽く身体をほぐしてから宿屋の部屋を出る。鎧は着けているが大剣は持っていない。朝飯前から剣を持ってもしょうがないからだ。

戸口をくぐると、隣のドアが開いてそこからぼさぼさの金髪が見えた。

「あはよお」

堪えきれず、というよりあまりの可笑しさに考える前に笑っていた。朝から何事だと、宿の客達が目を向いてこちらを見ている。

「ふえ……、ん——何笑っているのよ」

「……だって、お前、その頭と面は何だよ。はは、どうにかしろよ」

寝ぼけ眼を無理矢理しかめた顔のまま、カミエは自分の髪を撫でた。

「う……、しょうがないじゃない。あたし、低血圧なんだから」

朝食は漬け物にされた山菜が沢山に、塩焼きのカービエ肉だった。酸っぱい感じの漬け物はこいらの山岳地帯では良く出される物だが俺はあんまり好きじゃなかった。しかし空腹には勝てないので食べる。肉は少ない。

俺の目の前では未だにところばさばさなままの金髪が、ふらふらと力なさげに揺れながらその漬け物を口に運んでいた。

「うまいか？」

「さあ……」

どうやらなんにもかんがえてないらしい。見れば判るが。

「お前って朝はいつもそんな感じなのか？」

黙々と食事をするカミエの手が止まった。

苦い味のするお茶を啜りながら俺はカミエの言葉を待った。

そして、乾いた声が呟いた。

「いつもは、盾がいてくれるもん……」

まずった、と咄嗟に思った。しかし、ほぞを噛む俺とは裏腹に、顔を上げたカミエは笑顔だった。太陽みたいな笑いだった。

「ごめんね、私寝起き悪いから……、少しいじけ過ぎちゃった。コランドを不愉快な気分させちゃったかな」

このような本調子でないとき、人はポロリと本音を漏らすのだろうか。彼女はどんなときでも明るく朗らかに振舞いたいのだろうか。誰にも不愉快な思いをさせたくない、そう心に誓っているのかもしれない。しかし、彼女の本心は、今はひどく落ち込んでいる。それでも気丈にあらうとする健気な彼女が、少し痛々しくて哀れに見えてしまった。

だから、俺は朝の澄んだ空気が落ち込んだものになってしまわないように、声明るく話しかける。

「別に気にしてないさ。家にも寝起きの悪い奴は何人かいたぜ。っていうか、なかなか人里離れた場所に屋敷おっ建てて毎日研究ばかりしている魔法使いなんて、人格的に問題のある奴ばかりだからな」

ここぞと思い、声を励ました。

「朝飯食わない奴。朝飯は夜通し起きてて、そいつにとっては夕飯な奴。朝からにのいの凄い訳のわからんゲテモノ食っている奴。かと思うと、テーブルいっぱいフルコース並べて優雅に食べる奴……もう、食卓は滅茶苦茶、秩序なんてありゃねえさ。第一、世界中回った奴も多いから、食っているモンも人それぞれなんだぜ」ふふ、とカミエが笑った。乱れた髪は、さっきまではすさんだ印象で彼女を飾っていたが、彼女が笑みをこぼしはじめた今は、逆に親しみやすい感じを彼女に与えている。

「でも、それって寝起きの悪い人と食えることとは関係なくない？」

「関係あるんだよ。どいつもこいつも勝手なモン食って、思い通りの物が出てこねえと不機嫌になって他人の食事邪魔するんだ。で、常識のねえ連中ばかりだから手加減無しに暴れまくる。——おお、こうやって家の外で他人事みたいに話せると、出てきて良かった、て心から思うぜ」

食事の手を止めてくすくすと笑ってくれている。周りの顔もちちを向いて微笑んでいる。あたたかな空気、ようやく元気の出る朝

がやってきたって感じだぜ。

俺は一呼吸する。

「寂しかったら言っていいいんだぜ。俺は何もできないけど、聞いてやることはできるんだから」

向かい合う顔は、少し目を見開いて、細めた。

「うん、わかってる。でも、さっき言ったじゃない。何度も言わせないでよ」

「ああ、そうだったけな」

そこで、ふと思いついた。

「そういえば、昨日変な夢を見たぜ。俺は誰か知らない男になっていて、そいつは凄い苛立ちながら古くさい建物の中を歩いているんだ、遺跡みたいだった。男にはもう一人連れの男がいて、俺のことを兄上と呼ぶんだ。二人は誰かを捜しているみたいだった。誰だと思う？」

カミエはひと言「冗談でしょ？」

本当だよ、と返す。

それから、会話は少し途切れ、食卓は静かな空気の中、寡黙な給仕達に片付けられていった。給仕が食器を下げ、食後の甘めの黄色い茶を啜る時、カミエは言った。

「盾と刀夜は元氣そうだった？」

「情緒不安定を除いては、元氣そのものだったな」

よかった、とくもり無い青空の笑顔が言った。

「ねえ、少し、話を聞いてくれるかな？」

黙って促す。彼女はお茶で口を潤して話し始める。

「私ね、昔からこうだったの。……えっと、寝起きの話じゃなくてね。子供の頃からみんなと違う力を持っていて、私は人を傷つけるのが怖かった。有り体に言って、自分が嫌いだった。盾はそんな私に、初めて逢った時はっけんどんだったけど、少しずつ素直になってくれて、今では私にすごく優しくしてくれるの。私はそんな盾のことが大好き。——独りでは生きていけないくらいに」

嗤って良いよ、と彼女。だけど、それは照れ隠しにしか見えない。彼女はむしろそれを喜んでいる。俺は最上級の微笑みとともにそのように伝えた。

「うん。ごめんね。私は、今の私が、これまで生きていた中で一番好きなの。たとえば、盾から半径五メートル以上離れられない自分になっても、私は自分を嫌いにならない。盾が、そう私に言ってくれたから」

相手にのめり込むほどの、傾いた『愛』。相手に認められる自分が好き。それは、極めて他者に依存した状態。

「コランドは、そういう人、いる？」恍惚とした声が俺に問いかける。

いいや、俺は否定した。すると、彼女は嬉しそうに目を細めた。

「それで良いと思うよ。盾だって、今私が言ったことをそのまま教えたら、きつとすっごく怒ると思う。——人は、自分一人の足で立てるようにならないと駄目なの、本当はね」

俺には兄貴がいるんだ。笑うことを止めて、話し始めた。

「兄貴は俺の師匠みたいなモンだ。剣でも、旅人としても。五年先に生まれた兄貴に、俺は頭が上がらない。でも、いつかは越えた。兄貴を。何故なら——」

俺が大剣士だから、だ。

金色の曙光に煌めくターコイズの双眸の奥に、今何が渦巻いているのか、予想すらつかない。ただただ嬉しそうに笑みを浮かべる彼女が目の前に座っている。

無言の時間が暫く続いて、やがて、俺達は何も言わずに同時に席を後にした。

外に出るとこの地方特有の朝に吹く熱い風が俺達の顔を撫でた。世界は、場所によって色んな風を持っている。乾いた冷たい風、空から降るように吹く風……。俺はそんな一つの地に限られた風を

感じるたびに、自分が旅をしているんだと、喜びと、孤独感に似た感動を覚える。

「ロマンチスト、って言うのかな？」カミエが言った。

「別に適当な称号を付けなくたっていいぜ。俺は俺の感じたように旅をする、てことだけだから」

吐き捨てるように言うのと、彼女は感情の薄い声で、

「コランドは自分のことがあまり好きじゃないんだね」と言った。川底に重く転がる石のように、彼女の言葉が胸に響く。

そうかもな、と言いかけた。でも、止めた。この感情をそのまま言葉にするのは卑怯だと思ったから。或いは――

「よくわからん。俺は、自分のことが嫌いなのか、好きなのか。……何の為に旅をしているのか、生きているのか。何をしたいくて、この大地の上で大剣を持っているのかがわからない」

そして低い太陽の空を見上げてから、俄に疑問が生じた。

「なあ、そういうば、あんた達は旅をしている理由、みたいなものはあるのか？」

見下ろしたカミエは無表情だった先刻からうってかわって、ちょっと後ろめたさ、悲しさ、それから秘め事をするような薄笑いと言った豊かな表情を浮かべていた。その表情に、俺は、ほんと胸和むものを感じた。

「うーん、長くなるかなあ」

「話しづらかったら構わないが」俺は質問に付け足した。

じゃあ、とカミエ。謝るような声音で言う。

「私達が旅をして何をしているか、だけ言っている？」
それを肯定した。

「世界を見て回っているの。世界が、どれだけ壊れてしまったか、どれだけ治りは始めているのか、この目で見るために」

せせらぎのように優しい声が零した言葉に、俺は贖罪めいたものを感じた。

「私達が戦って、壊して、創りなおして、まもった世界だから」

決して反らされない緑の瞳にこもる、後悔と誇らしさ、相反する二つの思いにハツとした。心臓が、物語をきく時みたいに高鳴っていた。

「私を許して」硬い言葉遣いで彼女が言ったのが聞こえた。

俺達の方へ歩み寄る足音が聞こえた。

金縛りの空気が壊れた。

「もし……。お二方よ、私の言葉に傾ける耳がお有りかな？」

ふりむくと、そこに立つのは短い白髪の老人だった。細く開けられた目蓋から見える翡翠色の瞳がいやに鮮やかに見える。

老人は無言で俺達の返答を待っていた。彼から目をそらさずにカミエの気配を伺うと、彼女も俺が答えるのを待っている。

——く、空気が重いぜ。

「あゝ、なんだいいいさん。こっちは構わないぜ、なにぶん迷子の身なんぞね」

抗うように、できる限り軽い口調で答えると、老人は満足そうに嗤った。

「正直だな、旅人。普通は今のよう刺激されれば人はまず拒絶するものだが。彼の誇りと驕りが強いほどな。さすがはヘーフナーの大剣士」とでも言おうか」

クーフナーの大剣士、と言う言葉にカミエが感心したように、へえ、と小声でこぼしたのが感じられた。この呼び方が本当に知れ渡っているんだと言いたげな、そんな感嘆の息づかい。やっぱ信用度が低いかなと思う一方、俺は溜息ついてから老人の言に答える。

「分相応の振る舞いをしただけさ。道に行き詰まった時、差し伸べられた手には素直に手を伸ばす。旅人としては当然だろう？」

すると老人は意地悪そうに口を歪める。

「もし、私がそちら方の話を一部始終聞いていたと告白してもかもう一度溜息。」

「聞かれて困る話なら外でしないさ。――それより、じいさん名前は？ 俺はコランド、コランドⅡクーフナー、だ」

老人は細い目を緩い弧に曲げて俺を見上げてくる。確かに、彼の振る舞いには人を挑発するものを感じられる。わざとやっているのだろうが、俺はまだこれくらいには耐えられる。家にはもつといやらしい奴がごろごろしていたからな。

カミエは気配を微かに、まるでいない人のように振る舞っていた。こんなならみ合いがすこし続いてから、ようやく老人は答えた。

「私の名はジェル・ダⅡシンメイス。『大地の鼓動』の物語は知らぬか？」

またしても俺は溜息をつかなければならなかった。

「おい、シンメイスの性を持つ〈導き手〉が出てくる話は『大翼の鼓動』だろ？ ……じいさん、いい加減人を試すのはよしたらどうだ」

すると、ジェル・ダは今度こそ心から満足したように大声で笑った。その声の大きさに、カミエはびくりと微かに肩を振るわせ、俺は何度目かの溜息をついた。これが最後になるように祈りながら。

たいていの老人と違い、ジェル・ダはむせかえることなく、ひとしきり笑い通したようだった。それから、ニツと唇を横に広げ話し始めた。

「すまん、どうにも私は意地が悪くてな。今まで物語にしか聞いたことのない〈クーフナーの大剣士〉に逢ったとなれば、少し調子に乗ってしまうのも無理はないというものだろう？ 大剣士コランドよ、この十字架にお前の道を示してやろうか」

ようやく話がまともな方向に進みそうだ。そう感じて俺は余計なことは何も言わず、差し出された鳥の姿にも似た十字架に手を伸ばした。しかし、手にしてみても十字架は何も反応を示さなかった。

「お前では駄目なようだな。そっちの娘御に持たしてみろ」

少々の戸惑いを見せるカミエに、俺は黙ったまま十字架を手渡した。

彼女の手には十字架が触れた瞬間、光が弾けた。閃光がおさまった後、十字架は彼女の手の上でぽそりと白い灰になって崩れていた。びっくりした彼女が手を振ると、かつて十字架だった白い灰は風に舞い消え失せた。それを見てジェル・ダは、ごちそうさまだな、と苦笑した。

「それは強い願いに反応し道を示すものだが、強すぎる思いには逆にやられてしまう。お前がどれだけ元の世界に帰りたいかはわかったから、少し肩の力を抜いてもう一度これを使え」

そう言ってジェル・ダは懐からもう一つ鳥形十字架を取り出し、カミエに差し向けた。一呼吸してから、カミエはそれを手にした。今度はいきなり十字架が弾けることはなかった。水平に保たれた彼女の柔らかな手のひらの上で徐々に光を高め、そして南西の方へ軌跡を残し飛び去った。

「あの方角に、カミエを帰す場所があるのか？」

「多分な。当たるも八卦当たらぬも八卦。八卦は私の術ではないけどな」

静かにカミエの方を見る。そこにあるのは、長い船旅からようやく故郷の岸辺に臨む女の顔だった。

「きっと大丈夫。私は行くよ」

彼女が言った。俺はジェル・ダに短く感謝を述べ、すぐに道の先に立つ。

「なら行こうぜ。付き合わせてくれるよな」

背中越しに見た彼女は、はにかむように笑って、ありがとう、と言った。

「違ったらごめんね。先に言っとくよ」

「どうせ行き当たりばったりな旅さ。気にする理由すら思いつかねえぜ」

——思うところがない訳ではない。迷いを抱き続ける俺に、心細い思いはあれども迷いのないカミエ。もっと、彼女と会話を重ね俺は知りたい。自分に何が足りないのか、何を持って旅をしていけば

いいのか。

しかし、今はその思いは心に封じ込めよう。彼女を足止めしてしまわないように。

3 (後書き)

カミエの戦闘シーンはいかがだったでしょうか？
術の詠唱がいれられなくて個人的には寂しかったです。
次で最後です。このままお聞き下さい。

蒼天は彼方まで澄み渡り、稜線にぶつかるまでその青さは変わらない。果てのないように見える空の下、仰ぎ見れば深い青にただただ圧倒され、啞然とさせられるだけだった。

独りだったら、ただ口を開けて立ちつくしてしまうだろう大空の下、俺が歩き続けるのは、ひとえにこの世界に迷い込んでしまった独りの若い女の為だった。

その女、カミエは、今、空に向かってツンツンと伸びる緑の草に足を取られ俺の遙か後ろにいた。俺の靴は薄金で靴底も表も覆われた作りなので、砂利道だろうが茨の道だろうが、そんな物はなんでもない。しかし、軽めの革で作られたカミエの長靴はそうもいかないうで、見ていれば実に歩きづらそうにしている。

「俺の足跡の上を歩きな、カミエ。そうしたら、少しはマシになるんじゃないか」

この地面に生えたオレニ草、乾燥に強いオレニ草は荒野には良く生えている物だが、ここに生えているのは少し珍しい。鉱石の成分が強い今いる地方ではあまり植物自体が生えていない。それがちよくちよく、進むに連れどんどんは密に生えていると言うことは、土の成分が俺達の行く先に向かって徐々に変わりつつあると言うことだ。実際、抜き身のまま持っているヘトリニティブレードが土壌成分の変化を告げている。

振り返ると、カミエは疲労と天上に架かりつつある太陽の熱によって流される汗を拭いつつ、俺から十歩ほど離れて歩いていた。どうやら、彼女と俺の歩幅の違いに気をつけているにも拘わらず、まだ速く歩いているようだ。

「コランド、速く、歩きすぎ。っていうか、ここ、歩きづらい」
追いついてきた彼女が息を切らしながら言った。俺は苦笑するしかなかった。

「すまん、気をつけていたつもりだったんだが」

「それはどうもすみませんね。……それより、さっきなんか言った？」

嫌みを言ったり聞き返したり、どうやらまだまだ体力はありそう
だ。あるいは、揺るぎない思いの為か。

俺はもう一度先程の提案を繰り返した。

「やだ」即答だった。

「コランド歩幅大きいでしょ。私じゃついてけないもん」

彼女の顰めた眉の間を汗が一筋流れた。俺はタオルを懷から出して新たな提案をした。

「もう少し歩いて落ち着いて腰を下ろせる場所を探そう」

タオルを顔に当てた彼女はこの提案は受け入れられてくれた。

今、俺達が休憩しているのは、まるでわか雨の雲のように、草原を歩く俺達の目の前に突如として現れた石造りの建物の影。座っているのは『扉』と『翼』とその他のモチーフがみっちりと印された柱の欠片だ。

持ってきたロールパンを無言で口に入っているカミエが目に入る。
言葉のない彼女の横顔は心なしか緊張しているようで、しかし不安と言った様子は見られない。

彼女の気持ちはわからないではない。この周囲には確かに濃密な魔力的エネルギーが満ちている。しかも、風と一緒に流れてくるような地面になじんだ魔力ではなく、全く違う場所から来ているような刺激に満ちた魔力が。彼女はこれを感じているのだろう。

つまりそれは、ここが異世界にないし、どこか『別の場所』には繋がっていると言うことを裏付ける確かな印。このことは彼女を帰れるかも知れないという期待と、さらなる迷廊へきつくかも知れないという不安との間で彷徨させることになっているのだろう。だが、彼女はこの遺跡に足を踏み入れることに躊躇うことはないだろう。

たとえば、これが誤った道だとしても、彼女は前に進む。それがカミエという旅人だと俺は思っている。

——俺とは違う。

やがてカミエが食事を終え、予想通り不安の一言も口にしないカミエに先行し、遺跡の中に足を踏み入れた。

遺跡の中は風の音で満ちていた。そちこちに光の漏れ入る壁のから入るのか。いや、それだけではない、この壁の内側にも風があるのだ。

風は、巨大な洞穴のような遺跡の入り口から少し入ったところ、様々に橋廊がわたされた吹き抜けの広場の高見から吹きおろされている。まるで、そこから風が招き入れられているみたいに。見上げる空洞の壁は翡翠色、壁面には等間隔に印された紋章が幽かな光を放ち薄暗い中でもはつきりと見ることが出来る。

吹いてくる風を胸一杯に吸い込むと、林檎のようでそれより少し感じの甘いにおいがする。かび臭さなどはない。それとも、この遺跡に生えている蘚苔類がこんなにおいなのか。むかし、部屋の香りを良くする苔を見たことがある。獣のにおいなども全くない。それによってこの場所が非現実的な場所に思える。

「変な感じの場所だな」俺は思わず感じたままに声を出した。

「うん、でもなんだか胸がざわざわする。……………懐かしい感じ」

「懐かしい？」

その問いに彼女は答えなかった。うーんと考えるように少しうなつた後、にこりと笑って歩き始めてしまった。

遺跡には人が住んでいたような痕跡は全くなかった。探索の途中で獣の糞を見付けることはできたが、頻度は非常に少ない。おまけにどれもかさかさに風化していてにおいも何もあつた物ではない。

遺跡の内部は、折りたたまれるように張り巡らされた廊下がとにかくだらだらと続いていた。黒灰色の壁は、微かにチョークのよう

な白い線で魔術的なモチーフが絶えることなく描かれている。触るとつるりとしているが、光沢を持たない。それに加えて、窓からの明かりはないので暗闇は深い。トリニティブレードを発光させて灯りとした。

時たま、小部屋を見付けることができた。小部屋には石の床と連続に作られたテーブルと椅子、なかにはベットのある場所もあり、まるで宿泊施設のようなだった。だが――

「こんな何もない場所でゆっくりしたくないよね」

常に吹き続ける風が、埃や塵を積もらせることはない。石の壁を割って根を生やす草も一本だってない。その清浄さは、いうなれば「空白」であり、まともな神経の持ち主なら速やかにここから立ち去る事を希望するはずだと、俺は思う。

ただただ濃密になりつつある外来の風のおいが漂い、ヒーヒーと音が響き続ける遺跡の中、俺達は黙々と進み続けた。

始めに見た広場の一番の高所にある螺旋階段に道は通じ、階段の終わりにある鮮やかな菖蒲色に染められた扉を開くと、三方の壁に七つの大きな窓がある、空の見える少し広い小部屋があった。

入った扉の横に紅梅色のこれまた鮮やかな扉がある。どうやらこれを進めば俺達が目指す場所へたどり着く最後の橋廊に出るようだ。しかしこういった扉はすんなりとは開かない物だ。俺達は手がかりを探して部屋中を調べはじめる。まもなくして部屋の床中央に四角いくぼみを発見、ざらざらとしたタイルに何やら刻まれてる。

「『影を墮とせ』」

読めはしないが、トリニティブレードの平に字をまねて書くと解読をしてくれる。しかしそれに文字以上の意味を見いだせない。

なになに、とカミエが顔を覗かせる。カミエもこの言葉の意味がわからず、とりあえず剣でたたいてみたり、波動をぶつけてみたりしたが、何も変化はなかった。

と、部屋の窓際近くに転がっている石ころが気になった。拳大の

石は、ここに来るまでもない訳ではなかったが、微妙に不審だ。

石を手にとって観察する。トリニティブレードに分析させても、せいぜい隕鉄分が多いという分析しかない。と、カミエが何かに気がついたようにこちらに手を伸ばした。

「ねえ、それ私に頂戴」

俺が石を渡すと、カミエは石を胸に抱いて目を閉じた。

青空が影を落とす部屋の隅に、前触れもなく光が届いた。カミエが光り輝く翼を顕したのだ。

予告のない行動に俺が声を失っているのを、見ているのか見えないのか、彼女は俺の方に何の反応も示すことはなく、手にした石に波動を伝えはじめる。しばらくして彼女が手を下ろすと、自ら微かに光る石は落ちることなく空中に留まり続けた。

するとどうだろう、石は床面に影を落とし、黒い穴のような影を中心に魔法陣が浮かび上がった。

だが、それ以上何も起きない。

「――まだ、石があるな」

うん、まかせて、とカミエは次々と石を浮かばせていった。総数七つの石、すべてが終わった時、床に浮かびあがった七つの魔法陣から実体を持たない黒い影が飛び出した。

それらは少し大きめの鳩のような姿だった。バタバタと音を立て飛び、そして――

「――――きゃあ！」

いきなり突撃してきた影の鳥を辛うじてかわしたカミエ。それを皮切りに次々に鳥の姿の影は攻撃を始めた。

「くそ！」

咄嗟に影に向かって大剣を振るう。しかし、実体を持たない影に斬撃を加えることはできなかった。

「カミエ！ ドアは？」

赤いドアは開かない。肩を入れて体当たりしてみるが、その間にも奴らはカミエに攻撃しようとする。

——なんでだ？

黒い鳥たちはカミエを狙うものの、俺にはお構いなした。ときどき、ちらとこちらを見るように（奴らに目があるかはわからないが）止まることはあるが、決して俺を攻撃しようとはしない。

必死に身を守りつつ、実の結ばない反撃をし続けるカミエには悪いが、しばらくの間黒い鳥の行動を観察する。

そして気づいた。

「カミエ、翼をしまえ！」

え、と彼女はかなり怪訝な顔でこちらを見た。言いたいことはわかる。彼女にとって戦いの途中に翼をしまうことは、剣士が戦闘放棄して剣をしまうことに等しい。しかし——

「いいから、早く！」

一羽が低空から飛んでくるのを大きくステップしてかわしたカミエの背から光が消えた。すると、一瞬の間の後、影の鳥は今度は俺の方に飛んできた。

——予想通りだった。

予め背中から外しておいた大剣の鞘に、一息に大剣を仕舞う。そして、もう一度カミエに呼びかける。

「気配を隠すんだ」

そう言って、俺も壁に背をあずけたまま姿勢を低くして呼吸を抑えはじめる。ちよつと離れた場所で、カミエも強張った面持ちでしやがみ込んでいた。

すると、どうだ、七羽の影の鳥たちは俺達を見失ったように旋回し始め、やがて七つある窓に一羽ずつ飛び込んだ。

影の鳥を飲み込んだ窓が黒いカーテンを引くように光を失っていく。

部屋にも暗闇が訪れる。

完全に視界から光が消えた次の時、部屋の壁中に描かれた絵画のような規模の魔法陣が光り始めた。

「コランド、これは……………」魔法陣の桃色の光に照らされたカ

ミエが疑問顔で呟いた。

「これがこの部屋の仕掛けだろう。――さっきの影の鳥は光に反応していたんだ。だからまず光の羽を持つあんたを狙い、それから俺の大剣に目を付け、それらが無くなると外から光が入ってくる窓に飛び込んだんだ」

紅梅色の扉に触れると、扉は静かに上にスライドして道を開けた。後ろを振り返ると、部屋を中心、言い換えれば魔法陣の中心に二つの甕が現れていた。先程まではなかったものだ。

「これ、何だと思う？」近寄ってきたカミエに聞いた。

カミエは首をかしげた後、特に躊躇わずに甕を持ち上げた。俺も特に警戒せずにもう一つの甕を持つ。

その中には干し果物が入っていた。青緑の見たことのない形。においは林檎のような、そう、この遺跡全体に漂うにおいそのものだった。

甕の側面を見ると幾つかの異なる文字で何やら書かれており、俺の読める三つの文字はともにこのように記していた。

『行く者は食せよ』

カミエの持つ甕にはこうあった。

『留まる者は食せよ』

俺は甕を片手で持ち、彼女に問うた。

「どっちにする？ 『行く』か、『留まる』か」

この質問に答える前に、彼女は自分の持った甕を床に置いた。

「私は帰る。だから『行く』ね」

彼女に甕を手渡し俺は床の甕を取る。今度の甕には、この遺跡周辺によくあるカーミカンが入っていた。

それを見て俺は考える。これを食べて『留まる』か、カミエと同じ物を口にし『行く』か。なぜなら俺は旅人だ。この地上の誰も見たことのないだろう別の大地に、興味がない訳がない。

「どうしたもんかね」自然な気持ちで彼女に聞いてみた。

私は別に良いよ、と既に帰路への食物を嚥下した彼女は微笑む。

「でも——、世界を越したら簡単には家に帰れなくなると思うよ。それでも良いの？　あなたには、会えなくなったら困る人はいないの？」

いない、と言いたかった。しかし、この時俺は兄のことを思った。
——「強くあれ」。

「そうだな、まだ、俺には早いかな……」

はつきりと言った訳ではない。開いたドアから入ってくる風の音に紛れるくらいの声で、彼女には聞こえたのかわからないけれど、顔を上げると彼女は優しげに微笑んでいた。

そして俺はこの世界の『留まる』ための果物を口に入れた。その瞬間、遺跡の奥から吹く風が、強く、俺を押し戻そうとするかのようを感じられ始めた。

「元気でな」俺は言った。

「あれ？　もう少し、ついて来てくれないの？」

カミエはそう言ったが、次の時には風に押される俺の状態を悟ったのか、そっか、とほんの少しだけ寂しそうに笑った。

「『汝の歩む大地が常に揺るぎなきものであらんことを』」

これは俺達の世界で通じる見送りの言葉。カミエにはわからない。ちよつと居心地悪そうに微笑む彼女に、別れづらくなる前に背中を向けて来た道に戻ろうとした。

ありがとう、彼女の声が聞こえた。

「ここまで、一緒に来てくれて。コランドと一緒にいてくれて私は凄く助かったよ」

どういたしまして、と振り返らずに言った。しかし、彼女は俺が今一度振り返ることを望んだ。

「ちゃんとお礼を言わせて、コランド………」

「礼なんて。これで無事に帰れるなんてわからないだろう？　今は、礼を言われる筋合いはないぜ……」

「そんなのだめ……！」

彼女が怒ったような顔をしていた。初めて見る気がする。はっと

息をのむ彼女の剣幕、彼女のまっすぐな視線の美しさに、俺の意識はすべて彼女に奪われてしまった。

「もっと自分に自信を持って。自分を認めてあげて。コランドはちゃんと私を助けてくれた。それは、私が盾のいるところに帰れるようにしてくれた事じゃない。私が、盾のいないところでも自分の足で歩けるように、あなたが励ましてくれたことが、私を助けてくれたことなの。――遺跡で光に包まれて、気が付くとジュンの気配の全くしない荒原にたった一人立っていると気づいた時、私は頭が真っ白になった。身じろぎもできないであの場所に立ちつくしていたの、あなたが来てくれるまで。あなたがいてくれたから、私はここまで来れたの……」

「でも、あんたは俺が見た時は笑っていたじゃないか。俺は何もしていない。あんたを励ます事なんて何も」

カミエが笑った。初めてあった時と同じ笑顔で。でも今初めて俺は、薄い仮面のような笑顔のその裏に隠された、どうしようもないほど深い戸惑いを見ることができた。

「コランド。あなたは立派な大剣士だよ。――今、この瞬間でもあなたはその大きな剣の重さに負けずに、それを背負い続けている。そして、その上に私の戸惑いも背負ってくれた。あなたの背中は、立ち止まることなく私をここまで導き続けてくれた。だから、あなたは、他の人にはまだそうじゃなくても、私にとってはへ大剣士コランドだよ」

それは絶対、と彼女は締め括った。

嬉しかった、目尻が熱くなるほどに。唇が半開きのまま震えて、何も言えなくなるくらいに。

「『あなたの天に、神の恵みたる光が永遠に絶えぬ事を』。コランド、また会えると良いね」

「迷っても、かならず帰れよ」

これを言うのに、時が止まっているように感じられるほど永い時間がかかった。そして、カミエはそれを待っていてくれた。

噛みしめるように、優雅に瞼を閉じた彼女が、まかせて、と答える。

そして俺達はどう一度微笑みを交わし、道を分かった。

魔法陣の光に照らされる彼女の背中が戸口をくぐり壁に隠れる。すると魔法陣は輝きをおさめ始め、この身体は闇に包まれた――。

ト

瞼を風が撫でたのを感じた。目を開けると、そこはさっきまでいた遺跡の入り口前だった。見上げた空はくもり無い珊瑚色。紅に染まった夕焼け雲がのんびりと空を横切っていく。

――ああ、良い空だ。

どう良いのか。そんなことはわからない。表現できない。ただ、漠然と『良い』と思うだけだ。そう思って、空を見上げていれば、心がいっぱいになるみたいで、それだけで満足だった。何も、要らなかった。

満ち足りた気分で、俺は直感的に選んだ南東の方角へ歩き始める。この先、どのくらい行けば人里があるのかなどわからない。道も知らず、ただ思うままに、風の吹くままに歩く。何故なら、俺は旅人だから。

そして、俺が大剣士であるから。

と、ぐると見回した黄昏の空の南に細い三日月が架かっていた。赤い空を渡る船のような月の横に、もう一つの船が浮かんでいた。

彼女は無事に愛しい者の下へと帰り着けるだろうか。

俺は、彼女の身を心配してこの様に憂うのか？　ただ、自分が彼女の為ではなく己の保身のみを憂っているように感じる。

でも、今は止めよう。彼女の言葉を鵜呑みにして、透き通るこの風のように、何も考えず歩いていこう。

一陣の風が走る。このにおいは今立つ大地のにおい。そして、微かにまだ見ぬ大地のにおい。

4 (後書き)

結局、起承転結を作れなかったのが駄目だったな、と一番に思っています。その他にも未熟な部分はあるでしょうが……。

適当にコメントを下さると嬉しいです。

この話はとりあえずここで終わりで、続きはありません。しかしコランドとカミエについてはそれぞれ独自の物語を持っているので、いつかそれも書けたらいいかも知れません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2663d/>

放浪

2010年10月15日22時51分発行